

夢幻の如くなら

(二〇一三年 十月)

人間界での五十年と云う時の流れは天界での一日に過ぎない程の出来事なのか、どうなのか…。

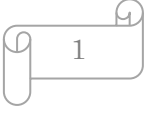
現世を生きる身の存在では思い及ばぬ範疇ではあるのだが、只、十代の頃には無限に有りそうな気がしていた時の流れと云うものが、いつしか、あつた瞬間に一年間は、飛んで行く様だ。

道中での多くの人々との出逢いや思い出の数々と云うものは、遙か彼方へと霞んでしまった様だ。人も世も隔世の感である。

若さに満ち溢れていた筈の青年や少女達は既に、老境の域にあり、筋骨隆々で強靱に鍛え抜かれた肉体で、リング上で所狭しと大暴れをしていた屈強な大男レスラー達や或いは、「蝶のように舞い、蜂の様に刺す」と言われていたプロボクシング・ヘビー級チャンピオンのモハメド・アリや国内ではジャイアント馬場、アントニオ猪木、ジャンボ鶴田等の大活躍もあったが、既に、彼らの多くもこの世のものではなかったり、或いは、か弱い老人になっていたりだろうか…。

浦島太郎の玉手箱でもあるまいが、時の流れには逆らう術も無い。

そつとした現実の切なさには気付かされながらも、顧みれば脳裏の奥底深くに眠っていたのであるつか、半世紀前当時の頃の魂の記憶は今でも再び蘇って来る様な、そんな気がしないものもない。



大戦後から二十八年を経過した時代の日本では高度経済成長期の真っただ中と云った様な処ではあったが、ドル、円の為替相場では戦後の一ドル・二百六十円だった固定相場制から変動相場制へと移行されてからの年数がまだ浅く、一ドル・二百七十円代半ばと云った様な処であり、コースホテルでの一泊素泊まりでは日本円換算での概ね、五六百円といった様な処だった。

各国主要都市での目抜き通りのショーウィンドウには日本製品の広告展示が何処に行っても目立っていたのには驚かされたものだったが、一九七〇年代初頭当時の頃の日本企業の海外進出の凄まじいばかりの勢いと云うのが肌身に感じられたものだった。

日本の製造業、メーカーにとってはモノを作る程に、世界に向けて飛ぶ様に売っていた良き時代ではあったのだろう。

イタリア・ナポリ郵便局窓口では私の所持していた8ミリフィルムカメラにまで売ってくれとかなり熱心に懇願されたのだから、如何に日本製品への人気が高まっていたことだろう。

フランス北部セダンのブリジッタ家にお世話になった機会でのお父さんとの歓談の中では、「パリに行っても日本製品が溢れているから、両手を小さく広げてのシエスチャーを交えながら、

首をすくめての表情で話された時の面影が今も残る。

さらには、当時から十数年後での統計データによると、一九八九年の発行済株式時価総額による世界企業ランキングでの上位一〇社中においては、上位から、一位 N T T、二位 日本興業銀行、三位 住友銀行、四位 富士銀行、五位 第一勧業銀行等の日本企業五社がトップから五位までを独占しており、七位と九位には三菱銀行と東京電力が占めていたのだから、まさに、日本経済の凄まじい程の勢いであり、俗に「金余り」とも云われていた様な時代でもあった。

但し、その後の二〇〇五年のデータとなると、第一位から四位までは、セネラル・エレクトロニクス、エフソンモバイル、マイクロソフト、シティアグループと続き、日本企業では第九位にトヨタ自動車一社のみがランクインである。二〇一二年のデータによると、既に、日本企業の存在は舞台から消えており、上位の三社はアップル、マイクロソフト、グーグルと続き、第一〇位に台湾半導体企業の T S M C の台頭となる。

所詮、人世の定めは変わり行へるものであり、永遠と云うのは存在しないものである。「行く川の流れば絶えずして、しかも、元の水にあらず。よどみに浮かぶうたかたは、かつ消え、かつ結びて、久しくとどまりたる試し無し」¹、或いは「猛き者も遂には滅びぬ、ひとごとに風の前の塵に等し」²と云った様な処だろうか。

ともあれ、半世紀を超えた年月を遡っての自らの“時代劇ストーリー”を手掛けてみるとうやら、気分までもが五十年を超えての若返りそうな気分がしないものでもないが、何は無くとも、若々だけは取柄だとの自負していた様な時代ではあった。

欧州でのアジア人旅行者と云えば、その殆どが日本人か、ごく一部のマレーシアかシンガポール人程度しか見当らなかつた様な時代ではあった様だが、また、日本への外国人旅行者数と云うのも大都市や有名観光地などでの限定的な少数でもあったことだろう。

二十一世紀現在の世界では、あらゆる国籍の人々が国境を越えての移動が有る中では、かつての様に、外見上での日本人との判別が付かない様な風貌であったとしても、国籍までの見分けは付かないことだろう。

日本と米国、カナダと欧州の十数か国から四十数人の若者が集まっていたイギリス・ウィズビーチの農場キャンプでの二週間、農作業仕事には余り参加出来なかつたものの、人生の記憶史に残る楽しい日々であったとは云えないだろう。

毎週での最大盛り上がりイベントだったのが、週に二回、ダイニングの広間テーブルを片付けて開催されていたティスコパーティーだった。そしてこの時にも、いつも大音量で流されていたのがティスコパーティーの曲集だった。

若者たちからのほとばしる様な熱気で溢れていたディスコパーティーでは皆が目を輝かせながら大いに盛り上がっていたものだった。

LP版なので、複数の曲が立て続けに流れてはいたのだが、「スモーク・オン・ザ・ウォーター」の曲だけが、その後の半世紀を経た現在に至るも、曲を耳にする機会がある度に、条件反射のごとくに、あの時の情景の記憶が蘇って来る様な習性がある。それ程に強烈なインパクトのある曲だった様だ。頭の中での脳裏の奥底には、きつと、渦巻きながら長年来潜伏していたことだろう。

当時には二十代初頭くらいだった若者たちの情熱的な眼差しと表情は今も記憶に残るのだが、今や既に、彼らの全員が七十代の老境の域に在るのは現実であり、自然なこと、当たり前のこととは云え、時の流れと云うのは何と云う切ないものであり、また、残酷なものなのだろう。

キャンプでの、ほぼ毎日の様に時間を割いての会話の機会があった女性達と云えば、フランス人のマリリーとポーランド人のイレーヌ、フィンランド人のニーナとウーラ、ポルトガル人のマリアの、それぞれが違った様な記憶がある。

マリリーは私達の部屋グループにはいつも愛想良く接してくれた明るい子だった。

イレーヌは何処かしっとりとした大人っぽい雰囲気と私に向けては穏やかで優しい微笑の印象が残っている。私との対話の機会ではマリリーととも一番多かった方だろう。

マリアも大人っぽい落ち着いた雰囲気美人系だった。

ニーナはやはり、北欧系らしい金髪の可愛い子だった。

ウーラは、やや濃い目のショート赤茶系髪。やや小柄なタイプの子だった。

ニーナとウーラは今回、フィンランドから参加の女性二人だったのでいつも一緒に仲の良い友達同士だった。彼女達の笑顔の記憶は今に残っている。

男性陣での面影の記憶が多少なり残っているところと云えば、やはり、同部屋だった面々くらいではあるが、余り、イメージの記憶が浮かたない。多分、一度会った機会でもあれば、何人位は思い起す事は出来る。

また、ウィズビーチの町中での小さな楽器店にぶらり立ち寄った際に出逢ったフランセス・カマリリアの親切な対応には感激したものだ。

あれ程までの親切なおもてなしを受けながら、写真の一枚を撮ってもらっただけで、何のお返しも出来ないままに別れてしまったのは少々、悪かった様な気がしないものでもなかった。

キャンプを離れる時には、全員の一一人一人との握手を交わしながら、皆からの声援を背にしながら別れたのも、互い、互い、互いの様な心に残る今生の別れ場面ではあっただろう。

ウィズビーチからスコットランド・エジンバラを周遊してロンドンに戻って来るまでのヒッチハイクの道中でも、随分、多くの人との出逢いがあり、また、お世話になったものだった。



ともあれ、素敵な女性から放たれるオーラの様なものは万国共通であり、国境国籍には関係ない様だ。

旅路の最終段階ではフランス北部の小さな町セダンでのブリジットとの出逢いがあり、セダン湖を背景にして、絵に描いた様な情景は今も鮮明に浮かびあがって来る様だ。

お互いに、人生上での良い思い出としての「ページには残ったものだろう。」

(二〇二四年一月)

普段から、フェイスブックなどは、アカウントは有っても、殆ど使ったことは無かったのだが、本文をしたため始めたことから、ふとした思い付きで、五十年前に出逢った際に、良い思い出を残してくれたブリジットをダメもとで検索してみた処、ヒットしたのには、大変驚いた。

何枚かの私の当時の写真を添えて、

「彼のじよを知っていますか?」

との質問を投げてみた。

そして、ハロ田にして、漸くの反応があった。

半世紀を超えての、思いがけない連絡が取れたのは、正に、奇跡としか云い様がない程の感動的な驚きの出来事だった。

SNS上では詐欺やインチキ、偽情報も多いので、当初段階ではそれを心配してのサイレント

期間だったのかなとは推測したのだが、余り、SNSには参加していないとの由。只、離れているお母さんの安否状況の確認や必要な時での妹たちとの連絡用としての利用範囲ではある様だ。

「まさかとは思ったけど、貴女との五十年を超えての連絡が取れたのはすごく嬉しいよ。奇跡だね。お父さんやお母さん、そして、エーイク、フランシーヌ、エブリン、ジャスリン、アレンの妹達、皆さんは元気かな？」

「父は四年ほど前に亡くなりました。他は皆元気です。それにしても…。貴方は私の妹達全員の名前まで憶えているなんて、凄いわね。もう、五十年以上も経っているのに…」

「あはは。一度聞いただけで、書いてもらった訳じゃなかったから、名前のスペリングまで正確かどうかは判らないけど、貴女の妹たちの名前と、その当時の顔イメージのことなら覚えてるよ。。。だけど、お父さんが亡くなられたのは凄く残念だ。色々と話もしたいし、お世話にもなったのに…」

それから八日目の後には、今から五十年四月月もの前の、私が現地を去る際に日本語での書き残したメッセージ紙片の写真が送られて来たのには、さらに驚かされた。

「いつか是非、日本にも遊びに来てください。今度は日本でお会い出来ることを楽しみにしています」との内容であり、私の署名と日付を記したものであった。

何と…。(有名人でもなんでもない私のこんな些細なモノを五十年余りを経過した今日まで大切に保管されていたとは…。一瞬の絶句を伴う程の驚きだった。

また、同時に送られて来たお母さんの近影では、すっかり、全面的な白髪になられており、お顔には深い皺が刻み込まれての長い年月の経過が滲み出るように感じられたものだった。間もなく、九十歳になられるのだと云いし。



「お母さんとはねえ。貴方のことを今でも思へてゐるのよ。貴方と一緒に夕食の時に、貴方はお母さんの手作りのママジョナスがとも美味しいと云つて、『これだったら、どんな料理でも使えませぬ』って言ったのをお母さんは覚えてゐるのよ。貴方はそのことを覚えてゐるからさ。」

「H!!」と思つた瞬間、言葉が詰まった様な気がした。

あの場面では、そんなことを云つたのかなあ……。言われてみれば、そんなことを云つたのかも知れないなあ……。は、そんな気がしないでもないのだが……。それにしても、既に九十歳にならるるお母さんのお母さんの記憶力の確かさにも改めて驚かされたものだった。

それで、当本文中での、エピソードのシヨブネ家での夕食団圓の会話の中には、改めて、その時の会話内容への後追加とした経緯があった。

「くなられたお父さんのことでは、家では私との一番多くの会話があり、また、二度目の訪問時には当日のセダン駅への到着予定が想定外の交通機関トラブルでの大幅な到着遅れとなり、夜遅くに駅に到着した私をブリジットと妹エークとの二人で迎えに来てくださったのだった。

約十一時間以上の到着遅れとなつてしまつたことで、皆さん全員にも大変な迷惑を掛けてしまったものだが、一片の不快な気配さえも感じさせずに、快く迎え入れて下さつたものだった。

何れにしても、仮に「お父さんの出迎えが無かつたら、私は駅のベンチでの野宿となつて、翌日には、また次の何処かへと流れ去るしかなかつたことだろう。」

お父さんには、私が一本だけ持参していたネクタイを記念に差し上げていたのだったが、それを「お父さんへなされる時まつ」と所持されてたことのお話にも驚かされた。(高価なものでもないの……)

お母さんは、私が二度目の訪問時でのお土産品として差し上げていた小物を今現在も所持されてゐることのお話を聞いては、さすがに驚かされたものだった。

所詮、極貧旅行の道中での「お父さん」であり、精々、些細な品を差し上げただけの筈なのに……。

叶つたことなれば、少しでもお元気な内に、一度はお会いして、お礼の言葉だけでも伝えることが出来たらとは思つたもの、近年では心臓の病を抱えておられるそつであり、また、最近には転倒されて足の骨折をされたとの由。

日本人であれ、フランス人であれ、家族がそれなりの年代になって来ると国籍、国境には関係なく、人の営みには、同じ様な事情を抱えることになるのは必然であり、致し方ない。

思い出せば、当時には、二歳のアレンと、やや大人だったブリジットを除いては、箸が転んでもキヤーキヤー笑い転げる様な年頃の妹たちが居て、実に、賑やかで幸せに満ち溢れた様な家庭ではあつたと思つたのだが、特に、明るい性格の双子の姉妹、エブリンとジャスリンの存在が一家

ををららに、明るく雰囲気盛り上げていたのが印象的だった。

時の流れと共に、それらの時代も、既に、遠い過去のものとなり、妹達もそれぞれ四方へと散ってしまった様だが、また、家族について、その頃の時代が良い思い出はあったのだろうか。

「うん、いい思い出は、もう一度、皆さんにお会いしてお礼を伝える様な機会でもあれば良いんだけど……」
「うん、いい思い出は、もう一度、皆さんにお会いしてお礼を伝える様な機会でもあれば良いんだけど……」

「それは、もう諦めた方が良くかも知れないわね。逢って、貴方をがっかりさせたくはないから、もう一度返して来た。」

このままに、良い思い出として残しておいた方が良いのでは……との私への配慮からの言葉ではあったのだが……。

そもそも、人は誰しも年輪を重ねるに連れては、老化と共に体力、気力、外見共に劣化していくのは避けられない自然の摂理なのであり、かへ云う、私自身においても同様のことなのだから、それはお互い様のことであり、致し方ない処ではあるのだが……。

私の最近の写真の、三三枚を送ってみた処、余りの年月の経過の中では、直ぐには、イメージが繋がらないと云う反応ではあった。

また、私が抱いているのは確かに、彼女の十八歳のイメージしか持ち合わせていないのであり、それは、そのまま抱いておいて欲しい……、壊したくない、と云う切実な心情と云うのは理解出来ないものでもないのだが、まあ、それはお互い様のことだから致し方ない処だろう。

お互いに、老化現象のタイマーを一時停止したり、或いは、巻き戻しは出来ないのだが、半世紀前当時のイメージを抱いたままに、永久凍土の中にその記憶を凍結させて仕舞って置いた方が良いのだろうか……。

長い人生の時の流れの中では、ホンの短いひと時のことだったに過ぎないのだが、何処かにキラリとした光が溢れていた様な、そんな瞬間ではあったことだろうか……。

或いは、折角の天からの導きであったのかも知れない貴重な「縁」と云うものを、結果的にはそれを生かせなかったと云う由の至らなさをもったことだろうか……。

近々には、彼女も誕生日を控えているので、せめてもその誕生日カードでも送っておくことにしよう。

私が現地で五十年以上も前に書き置いたメッセージのメモ書きが今日に至る迄も残っていること云うことは余程に物持ちが良い様なので、それが届いたら、今生の最後の日に至るまでも保持して貰えることだろうか……。

記憶の糸を静かに辿りながら、思いを馳せる、道中で出会った多くの人々の、その時々の笑顔や面白可笑しかった様な瞬間のひびく声、次ぎから次へと走馬灯の様に浮かんで来る様だ。古い中世の街並みや、セタン湖畔の思い出のシーンが……。

人生上では数えられない程の様々な機会での出逢いと別れがあり、また、無数の幸不幸の出来事がある。そしてまた、それぞれの機会での無数の運不運もあることだろう。

只、途上での運不運だけは、専ら、選択の余地の無い天からの采配なのだろうが、何れにしても、その折々での結果の全ては、この世に生を受け、物心付いた時からの無数の分岐点での選択を繰り返しながらの一本の糸で繋がっている。

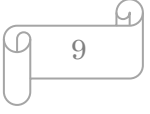
何処かでのホンのひとコマのタイムミンクのズレがあったなら、その出逢いと云うものは永遠に無かったことでもあり、或いは、口をすれ違っただけだったものだろう。

また、一方で半世紀前当時には、これからの世界は国境を越えてのグローバル化社会が益々進んで行く中での平和な時代に向かって行くことだろうが、期待半分の予感はいったもんだったものだが、二十一世紀も序盤を過ぎた今口には、まさか、国連常任理事国の一角が戦争を始めるという一大事を目の当たりにして、各国では次の大戦へ向けての準備を着々と進めているかの様な危機的な情勢に至ると云うのは想像の及ばない処ではあった。

果たして、人類はこの先、三度目、四度目と云う様な大戦を繰り返したり、或いは核戦争を引き起こす様なことがなければ良いのだが…。

宇宙の何処かに在るのかも知れない天界から見守っているしかないことだろう…。

この貴重な縁に感謝の気持ちを念じて、皆々への安寧と世界の平和を祈りながら閉じることにしよう。



(夢幻の如くなり)

「お父さん…」

「えっ!? 何が…」

「何かフツフツ言っていたが…」

「あ、いや…。何でもない…」

「雨が降り出して来たとか、夏が終わったとか…」

「あ、そっ…。少し、寝てみたんだけど…」

長い夢を見ていた様だ。

光陰矢の如し。人世の移ろいは夢幻の如くなり…。